
魔法の世界で

ゆーけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の世界で

【Nコード】

N5956H

【作者名】

ゆーけ

【あらすじ】

全く持って平々凡々な生活を満喫していたハズの主人公が、何の間違ったのか異世界へとばされてしまった！ありがちな設定で始まる物語は、ありがちな展開へすすむか。そしてありがちな最後へ…？

プロローグ

「魔法の世界へようこそ！」

こんなとんでもない言葉を言われた。

なにがとんでもないのかって？ それは俺の世界に魔法という力が存在しないから。

それならなんで「魔法の世界」なんて言われてるところに来たかっていうと、話せば長くなる。

そう、あれは今朝から話したほうが話しやすい。

カンカンカン！

金属で金属を叩く耳障りな音。

「起きなさい！ 早く起きろー！」

フライパンをおたまで叩く音のせいで耳が…

てか、こんな起こし方よりもっと優しい方法無いのか！

「うっさい！ どこのマンガだ！」

「こんな一度やってみたかったのよ」

俺が目覚めたことで気が済んだようで、下に降りていった姉貴。

全く、毎度思いつきで起こし方を変えないでほしい。三日前は布団を取り上げて。おとといは「火事だぁー！」って叫んで。昨日な

んか耳に吐息をはかれた。思わず情けない声だして飛び起きちゃったんだよなあ：

制服に着替えて降りていくと、トーストに乗ってるバターの焦げる良い匂いがした。

「今年であんたも受験生か」

「ええ、おかげさまで。面倒ったらありやしない」

「受験までは大変だろうけど、一度受かっちゃえば後は楽なもんよ」

「そんなもんですか」

「そんなもんですよ」

エプロンをはずして姉貴が席についた。

二人で「いただきます」をして食べる。

ここで説明しておくが、俺の家族は今、姉貴しかない。何故かというと、両親共に行方不明だから。

まだ俺が小学生、姉貴が中学生のころの話だ。「出かけてくる」の言葉を最後に、ウチのドアから親が帰ってきた姿を見た覚えがない。

一ヶ月経っても帰ってこないってんで、姉貴が警察に捜索願を出した。子供を置いて一ヶ月の旅行ってのは、ウチではあり得なかったから。あったとしても三日だったような。

それからというもの、姉貴が家事全般をやってくれた。二人分の飯作ったり、洗濯したり。そのときから俺も自然と家の世話ができるようになっていた。

まあ、そんなわけで今は二人暮らしってわけ。

朝飯を食い終わると、姉貴と一緒に学校に行く。と言っても、同じ学校なわけじゃない。

俺は中学、姉貴は高校。途中までは一緒だけど、中学校と高校の分かれ道まで。話し相手がいなくなる心配はない。それぞれ二つの道は、それぞれの行き先に向かう人で一杯なのだ。

と、いうことで高確率で俺の友人と出会うことになる。

「いよう！ 悠貴ー！ 先行ってるぜー！」

「いてえ！ 待てや京介ー！」

いきなり後ろから俺をどついたこの人。名前を五十嵐京介。変わり者。

そういえば俺の名前がまだだった。俺の名前が大川悠貴。ついでに姉は千奈美。

京介をダッシュで追いかけて、捕まえた頃には学校についてちゃった。

「あ、悠貴おれ一組だわ」

「お前もか？」

小学生のころから京介とは仲がとても良かった。それこそ親友級に。

三年一組の教室に着くと、ちらほらと同じ組のような生徒が話してた。そういえば俺たち二人以外名前確認してなかったな。

「どうやら、たいして態度のでかいヤツもないし、「いじめっ子」って感じの人もいなそうだ。」

「今年は楽しめそうだな」

俺の前に座った京介が話しかけてきた。どうやら今年の出席番号は京介が一番で俺が二番らしい。去年は俺の前に井藤って人がいたから、こうやって並ぶのは一年ぶりだ。

「ただ生徒がいい人揃いだと今度は先生がだれかって問題が出てくる」

「ああ、そんなのどうだっていいだろ。問題なのはクラスの団結力よ！」

「まーそりゃそうだが」

これで先生までいい人だったら、三年一組は一番の楽園となる。さて、人の数も増えてきたところで、始業式だから集まられて放送が流れた。ここで、それぞれの学年・クラスにどんな先生がつくのか分かるってわけだ。

「えーみなさん進級おめでとうございます。一年生は入学おめでとうございます。二年生はこれから一年生の手本となるように〜」

校長の話は長いと相場が決まっているようで。ウチの学校もしっかり長話をする気のように。立って聞いているんだから早いところ終わってくれないだろうか。

なんて考えてたらはるか後ろの方から「ドタン！」って音が。あー、これは誰か倒れたな。今年の一年生は体が弱いのがいるらしい。

ドタドタと先生らしき人の足音が集まる。

ここで校長先生はみんなを座らせる。まったく、倒れるまで聞かせて、少しは罪悪感というものはないのだろうか。少なくとも話を短くするという手を打ってくれると生徒は嬉しい。

「それでは、先生の配置を発表します。」

おお、やっとか。何分このときを待っていたことか。

ウチの先生は誰だろう。わくわく感とちょっぴりの希望を胸に、校長先生の声に耳を傾けた。

プロローグ2（前書き）

導入の仕方へたっぴでスイマセン。

プロローグ 2

一人ずつ先生の名前が読み上げられていく。密かに希望していた先生の名前も挙がる。

「えーと、三学年に移ります。一組は野田翔先生」

野田 翔^{かける}? そんな先生いたっけか。

「新任の先生とは運が悪かったなー」

なんだ、今年入った先生か。新しく来た先生のこと、校長先生が紹介してた気がしたけど、聞くの忘れてた。

京介の言うとおり、少し運が悪かったかも。去年ぐらいからいた先生ならどういふ感じに接したらいいかだいたいわかるけど、新しい人っていうとなあ。

「以上で、始業式を終わりにします。三年一組から順に教室に戻ってください」

終わりの言葉で、体育館にどっと人の話し声があふれだした。緊張もほぐれて、この瞬間が一番好きだ。

友達と適当に話していると、ステージ近くに立っていた野田先生と目があったので軽く頭を下げた。そしたら笑って返してくれた。第一印象はなかなかいいな。

新しい教室に戻ると、既に野田先生が立ってた。あれ? さっきまで体育館に居たと思ったのに、行動が早い人だ。

全員が一組に戻ったのを確認すると、先生が口を開いた。

「まず最初に。新しくこの学校に赴任してきました、野田翔と言います」

喋りながら黒板にチョークで大きく名前を書き出した。「翔」ってかいて「カケル」とも読むのか、初めて知った。

「この学校に二年間もいるみんなと違って、俺はまだこの学校の勝手がまだよく分かっていません。俺が困ったとき、みんなに助け船を出してもらうことがあると思いますから、そのときは助けくださいね」

どうやら少し軽い人のようで、だれでも友達になれるタイプっぽいな。イケメンだからなに言ってもうけそうだ。くそう。

教科書とか教室に持ってくるのを自発的に「手伝う」って言った生徒と一緒に先生も取りに行く。この空いた時間は、教室にのこった人には自習（休み時間）になる。

「悠貴、野田先生、なんかいい人っぽいなー」

「そーみたいねー。俺ら今年は超ラッキーかもな」

「おう、ラッキーラッキー♪」

そういやお正月でやった三百円のおみくじで大吉が出たな。…中吉だったかな。とにかく三年生になった今年は楽しい思い出がたくさんつくれそうだなー。

配られた教科書に名前書いたり、自己紹介カードー好きなこととか教科とか書くやつーも書いて、下校。初日は三時間ほどで帰れる

から大好きだ！ 毎日の学校が午前中に終わればいいのに。

家に帰ると、まだ姉貴は帰ってきていなかった。高校生は長いかな。

と思ったら玄関が開く音がしたので、出迎えに行った。噂をすればなんとやってやつですな。

「今年はどんな感じだった？」

：しまった、姉貴の周りによんだ空気があるのを見るのが遅れた。

「……………わあああん！！ 悠貴〜！」

「うわぁ！ なんだいきなり！」

ビックリしたからつい飛びついてきたところをたたき落としちゃった。：わざとじゃないよ？ 反射的にしょうがなかったんだよ？

廊下でうつぶせにねてる（ねかせた）姉貴がうめきだした。

「酷い悠貴…」

「いきなり飛びついてくるもんだから。それで、どうしたの」

「先生が一番厳しい先生になっちゃった…」

「んだよ、それだけかよ…。その程度で泣くなよ」

「その程度とはなんだ！ すごく大変な問題じゃないか弟よ！！」

「姉貴の友達は？ 同じクラスじゃなかったの？」

「ううん、同じクラス。みっちゃんもいたから安心した」

「じゃなおさら泣くなよ」

「うう…」

困った姉だな、とつくづく思う。そんなどうしようもない姉を置いて俺は俺の部屋に戻る。自己紹介カード書き終わってない人は宿題に出されちゃったから、それ書かないと。

自己紹介カードが入れてあるファイルを取り出して、探す。

ん？

あれ？

なくね？

あ、そーいや机の中にいれっぱだ。

すぐ取りに行かないと…いや、昼飯食ってからにするか。腹へったし。

居間に降りると、姉貴がパンに生ハムとチーズ、レタスを挟んだサンドイッチにかぶりついてた。

「ふあ、ふうひほはへふ？」

…なにを言っているか分からないと思うから翻訳を。「あ、悠貴も食べる？」と言っています。はしたないから食べ物を入れた

喋るなって言ってるのに。

「ああ、食う食う。それと、食い終わったらちよいと学校行ってくるわ。忘れ物してきた」

「初日からなにをやっているんだ弟よ」

「しょうがないだろ、忘れてきたんだから」

姉貴のと同じサンドイッチを食べて、チャリをとばして学校へ。そこには無人と思えるほど、静かな校舎が待ちかまえていた。

プロローグ 3

「なんだ…だれもないのかよ」

廊下は長く、静かで。時々なる時計の音がいつもより大きく聞こえたり。

残った仕事を片づけるのに教師がいるハズの職員室にも、人の気配がしない。

学校の中には、自分一人……。

「薄気味わりい。早く用すませて帰るか…」

教室のドアを開けて、自分のイスに手をかけた。

「大川」

！だれもいなかったハズの教室に、いつのまにか俺以外の人を立てていた。

フツと顔を上げて声の主を聞いてみると、野田先生だった。

「ビックリしたあ…いきなりなんですか」

「ずっと君を捜していた。君にやってもらいたい仕事があるんだ」

「俺を捜してた？ それ俺じゃないとだめなんすか？ ちょっとこれから用があるんですけど」

「そんな些細なことなんかよりずっと大切だ。悪いけど、すぐ行くよ」

自分で出した宿題じゃん。少しカチンときたが、なんで俺が持ち帰り忘れたこと知ってるんだ？

目の前にきて、なんでか手を握られた。え？ なにごと？

「とぶから、しっかり捕まってくれ」

最後の一言が耳に入ったとき、俺は立っていられなくなるくらい
の強い「立ちくらみ」に似てる症状が出た。突然のことで思わず座り込みたくなっただけ、先生の手が俺を座らせてくれなかった。

よろけもしない先生に「しっかり立て」って言われて、少しくやし
かったので足に力を入れて踏ん張った。

てか、こういうときは座った方がいいんじゃない？あ：

気づけば、目に映る景色が教室から見覚えのない遺跡みたいなど
ころに変わっていた。おまけにフードを深く被ってる人見るからに
怪しいかたもちらほらと。

「もう大丈夫だ。よく頑張ってくれた」

手をはなしてもらったとき、頭のくらくらは収まった。

ところで、俺は夢を見ているのか？ なんで学校の教室から見た
ことも無い遺跡みたいなところに居るんだよ、俺は。

「先生、これは夢ですか？ なんか見たこともないところに居るん
ですけどー。教室で寝ちゃったのかなー、あははは」

精一杯強がってみたんだが。

「これは現実で、さっきのは学校じゃない」

打ち砕かれた。

ここから先の言葉は聞きたく無い気がした。なんか、なんとなく、
とんでもない言葉が先生の口から飛び出そうな感じがしたから。

「歓迎しよう。ようこそ魔法の世界へ！　ようこそベルウェン王国
へ！」

なにがとんでもないと思ってたかって言うと、俺はメルヘンな世界
があるとは考えも、あるといいなあとも思わなかったから。

「へ、はあ…」

その話に返せる言葉は、ショートした俺の頭にはこんな間抜けな
返事しかできなかった。

第一話 夢なら覚めろ！ (前書き)

こんなどうしようもないものでも読んでくれる方に感謝感激。

第一話 夢なら覚めろ！

「ふう…」

五人のフード被ってる怪しげな人たちが、安堵の胸をなで下ろした。ような気がした。

フード深く被ってるからよくわかんないけど。

「悪い、ご苦労さん」

「おやすいご用です。それより早く国王様のところに」

突然思い出したように、先生は俺の手を引っ張って走り出した。

国王？　　そーいや王国って言ってたな。王国って王様が治める国だから王国って言うんだっけ？

走ってたら視界がひらけてきた。薄暗いんで躓いた。

「国王様のところについたらおとなしくしてろよ」

「もちろん」

国で一番偉い人の前でそんな無礼な行動とってみろ、ヘタすりゃ殺されるでしょ。

っと、その前に…

「ちゃんと説明してくださいよ」

「なにを？」

「どう言ったらいいか分からないんで、あとで」

「しょうがないな。さア、国王の間だ。キチツとしろ」

俺と先生の顔を確認すると、寝ぼけた顔した門番が木でできた扉をゆっくり開けた。

この人さっきまで寝てたな？

「ジョセフ国王、ただいま戻りました」

その部屋にいたのは、王冠かぶって、赤いマントを身まとい、それっぽいイスに座った…

「うむ！ 任務遂行ご苦労であつた！」

子供？ それも女の子！？

「こう見えても一国の王じゃが？」

なぜ思ったことがわかってんだよ。なんだこの子、迂闊なこと思えないじゃんか。

それにしてもなんで国王がこんなちっちゃい女の子で、なんで俺がそんなお偉い人と会わなきゃいけないんだ。

「なんだ、まだ説明しておらぬのかギルシェンよ」

「なにぶん急いでいたものでして。申し訳ありません」

聞いた覚えのない名前が聞こえたから、思わず後ろを振り返った。

あれ、だれもない。

「む、ギルシェンおぬし名を変えてあちらに居たのか」

「その方が幾分都合がよろしいかと思ひまして」

名前を変えてって：野田翔って偽名だったのかよ！
ギルシェンって名前、ちょっとカッコ良すぎる。

「そうだ、この場を借りてこの子に色々と説明したいと思うのですが、よろしいでしょうか」

「うぬ。ぬしもまだ混乱していることが多いと見た。ここで整理をつけるとうい」

変なところにとばされて行った先に心を読める女の子がいてなん
で人の心が読めるのか聞きたいけどその前にえーつと：

「：これは夢ですか」

真っ先に知っておかなきゃいけないことだろ。

これが俺の夢なのかハッキリさせなきゃ俺は病院の世話になるか
もしれん。

「これは現実じゃ」

「……………」

「ぬしに救ってもらいたいものがある」

「金魚ですか？」

「世界じゃ」

「これを説明するには、少し長くなるんだが、いいか？」

……あれ、いつの間に俺ってメルヘンチックになったの？
夢なんだろう？ 夢だと言ってくれよ！

「まず、今この世界が置かれている状況は――」

「さて、説明もおわったことじゃ。さっそくじゃが、ぬしに力を持つてもらおう」

「は、はあ…」

「楽をしようとするなよ？ ぬしが自力でつけるのじゃ」

「俺がお前に教えるから。今日はまいってるところから、明日からな。頑張ってくれ」

そんなこんなで、俺に与えられた部屋に案内してもらって、ふかベツトの上でぐったりとしているわけだが。

さっき先生：ギルシェンって呼んだほうがいいのか。に説明してもらったことを簡単にまとめると：

魔王が現れた。

世界征服しようとしている。

異世界の者がものすごい力を持っているということがある本に書いてあった。

それじゃその中で最も能力のあるやつを救世主にしようってことでギルシェンが選抜。

見事当選する俺。

：ってことらしい。俺ってそんな突拍子な能力もってないと思うんだけど。

いきなりだったから姉ちゃんに何も言っていない：心配するかなあ。学校二日目から休むことになるとかどうすりゃいいのよ。

その前に早く覚めてくれ俺の夢ええ！

ぐるぐると頭の中でいろんな事が回ってたけど、疲れたから考えるのを止めた。

突然世界を救えなんて言われたけど、俺にできるわけがない。早く覚めてくれ、と願いながら俺はゆっくりと瞼を降ろした。

第二話　まずは訓練を

「起きろー！」

姉貴の大声…ねむい…まだねむい…

「眠いじゃない！　七時だぞ！」

七時？　もうそんな時間かよ…仕方ない、起きるか。

「朝飯できてるから、早く食べちゃいなさいよ」

へーい。

そういや、奇妙な夢見たんだ。変な世界にとばされて、「お前に救ってもらいたいものがある。世界だ」なんて言われてさ。勇者にされる嫌な夢だった。

「世界を救う夢？　楽しそうでいいじゃん。なんかイヤなの？」

いや、そんなこと言われてみ？　確実に面倒だろ。

「そう？　そんな話より、早く起きてください！」

は？　俺いま朝飯食ってるんだけど？　てか何故に敬語？

「遅れるよ！　特訓するんでしょ？」

「うわぁ!!」

「キャッ!」

姉貴がイヤな笑顔を向けたせいで背筋が寒くなったわ!
全くイヤな夢…キャッ?

「やっと起きてくれました。ささ、お早くお着替えに」

着替えるってなに?

見たことない壁、覚えのない天井、知らないメイド?
さらに俺が寝てたこのベットはふかふか。布団派の俺には豪華過ぎる。

なんで俺、もしかして拉致られた?

「なにしてるんですか異界の勇者様!」

勇者って言葉で全部思い出してしまった。イヤな昨日の出来事を
全て。

ってことは、これは、夢、では、ない、?

「マジデスカ……」

酷く信じられないことがあると、それを信じようとしないのが人
つてものらしい。その意味を理解するには、十分すぎるだろ、これ。

促されるがままに軽装に着替え、促されるがまま大広間に連れてかれた。メイドさん曰く「訓練に使われてる部屋」だそうだ。

防音設備もしっかりしていて、どんなに暴れても壊れないぐらい頑丈だとか。

その大広間に、ギルシェンが剣を杖のようにして立っている。話しかけようとしたら頭にゲンコツ落とされた。

「三分前行動って先生に教わらなかった？」

「去年の先生には五分前行動って言われた」

「尚悪い」

頭にたんこぶ二つ乗つけて座らされた。

「まずは基本的な体力作りをしてもらう」

「せんせー質問ー」

「はい、そこ」

「普通魔法の国なんだから魔法から教えてもらえるんじゃないんですか」

「魔法ってのは体力がないと使えないので。その為もあったのこれです。他には？」

「体力ありゃ魔法使えるんですか」

「そんなわけないでしょう。当然魔力も必要になる」

「魔力？」

「いわゆる生命の力。自然にある生命エネルギーを分解・構築することで魔法ができあがる」

こんな感じで、と言って手を少し上げると、そこに火の玉が浮かび上がった。まさかアニメだけだと思ってたのをリアルで見られるとは。

その前に分解・構築とかこの錬金術だよ。

「普通の人が魔法を使うとあり得ないくらい疲れる。これは、人間が動くために必要なエネルギーを消費するからなんだ。普通の中学生はこれくらいの火の玉出すだけで四百メートル走を全力で走ったのと同じくらい疲れる」

「それじゃ俺その程度の火も出せそうにないな」

「だからこそその訓練だ」

突然、ギルシェンが剣を大きく横に振ったので、俺はバネのように後ろに跳んだ。

あれ、俺こんなに反射神経よかったっけ。

「この剣を使え。全てを受けろ」

安定するための後ろ足一步を踏んだ瞬間、剣を真っ直ぐ突き出してきた。顔を狙われてるのが分かったから、頭を後ろにのけぞらせ

る。

ギルシェンが突きだした剣は俺の髪を掠めて止まり、そのまま下に振り下ろされた。反射的に握っていた剣で防ぐと、金属が強くぶつかる音が耳を劈く。

相手の剣を横になぎ払う。あとは横に転がって逃げれば体制を立て直せる！

とか思ってたけど甘かった。ギルシェンは除けられ刺さった剣を、床を削りながら俺に向けてくる。

転がろうとして背中を向けたところを、その衝撃で壁にぶつとばされた。

「横に逃げるなら側転とかあるだろ。何でわざわざ転がるかな」

「イテテ：そんなマンガ式の理想的な避け方できるわけないだろ…」

「そう思うならここで側転やってみろ」

壁にたたきつけられた体を起こして、一年生の体育以来やってない側転をやろうとやけくそで勢い付けてやってみたら、意外にできた。

もしやバク宙も…なんて調子に乗ったことやってみると。

「なんでできるんだよ！俺スゲェ！」

意外にできるもんなんだなあ！運動神経こんな良くなったのか俺！

：…そういやさっきも、空気を切るかのごとく飛んで壁にたたきつけられたのに、あんまり痛く無かった気がする。おまけにあんな早い剣をかわしたりもできたな。普段ならあんなこと到底できないハズなのに。

「もしかして俺、こっちに來てからなんかパワーアップしてない？」

「あちやーバレたかー」

「隠す必要あった？　これ」

「だって運動能力が飛躍的に上がったなんて知ったら、これすっ飛ばして魔法使いたいとか言うと思ったし」

「そりゃ、こんな普通じゃない力があるってんならこんなことしないで魔法使いたいって言い出すだろう！

ところでなんでこんな力上がったのにさっきギルシェンに負けたんだ？」

「お前はこっちに來たから、力が上がる。逆に俺はこっちのほうでスタンダードなんだが、お前の世界に行くとき力が大幅に下がる。まあ、異世界からの來訪者限定“強くてニューゲーム”ってところか」

「つまり俺はこの世界の中学生ほどの力しかない？」

「いや、上級兵士あたり」

「上級兵士を見たことがないから分からないけど、つまり俺ってスゴイってこと？」

「その上級兵士あたりの実力がある俺が負けるってことは、この人は一体なんなんだ。」

「言っとくが、お前の力がそれぐらいあるってだけで、技術的な面は劣るからな」

「なんでみんな読心術持ってるの？」

「あれは国王だけ。お前は単純だからそんなもの使わなくても分かるの」

俺はそんなに単純か。

無駄話をした、と吐いてギルシェンはまた剣を構え始めた。このままいけば俺は心身共にボロボロにされそうだな。

何はともあれ売られた喧嘩は買わないわけにはいかないので俺も見よう見まねで剣を構える。

今日一日、ずっとこんな事をやって終わりにしてしまいそうな勢いだ、と思いながらまたやられる大川であった。

第三話 姉のことを思い出した

次の日、俺は重大なことを思い出した。

学校とか勉強とか、そんなどうでも良いような事じゃない。

そう、姉貴の存在。

ただ学校に忘れ物取りに行っただけなのに、一日も帰ってこないんじゃない今頃心配してるだろうな。

どうしたものかと起きたばかりの頭で考えていたら、ドアを叩く音がした。

「どうぞ」

「おはようございます。あら、今日は起きていらしたんですか」

ドアを開けたのは、昨日の朝、俺を起こしに来てくれたメイドさんだ。

そういえばどうして俺はこの人に起こされることになってるんだ？

「メイドさん、少し聞いて良いですか？」

「はい？ いかがなさいましたか？」

「昨日もそうだったけど、何で俺のところに毎朝？」

「貴方様のお世話をするように仰せつかったのです」

「なるほど。あ、それなら『貴方様』って言うの、止めてください」

「何故です？」

「なんていうか…もっと馴れ馴れしくしてください。呼び捨てでも構いませんし」

「え？ いいんですか？」

少し反対ひっくりされるかと思ってたけど、すんなり言うことを聞くもんだから吃驚びっくりした。この人はいろんな意味で関わりやすい人かもしれない。

普通に呼び捨てでも良かったのに、そこは譲ってくれず「悠貴さん」になってしまった。

「そうだ、もう一つ。俺には姉貴が居るんですけど、何にも言わずにこっち来ちゃったおかげでなにも書き置きすらしてないんですが、どうにかして戻れませんか？」

「お姉様がいらっしゃるんですか？ ステキですねえ。んー、わたしは分かりませんが、ギルシェン様なら何とかしてくれるのでは？ お力に慣れなくてごめんなさい」

「いえいえ、そのことを教えてくれただけで十分ですよ。そっか、ギルシェンか…」

会ったら言ってみるかな、どうにかして戻りたいって。

服を着替えて朝食を取り、今朝も訓練場に行くようにメイドさんに言われた。

そこにいたのは、ギルシェンだけ。また二人っきりでやるのか？

「おはよう、ギルシェン」

「おう、おはよう。今日は遅刻しないのか、偉い偉い」

また剣を構える。それに反応して、俺も同じように剣を突き出す。昨日の実践に似た訓練のおかげで、少し相手の動きは読めるようになったぞ。

近づいてきて振り下ろしてきたら、受け流す。

下から振り上げてくるのは、横に逃げる。

横からくる一太刀は、ジャンプすればだいたい避けられる。

これくらいは常識なのかもしれないけど、俺にとっちゃ大発見。ここから打ち返せば良いんだけど、そこまで甘くないようだ。一朝一夕で成しえたら苦労はないし。

一通り俺に打ち込み終わったのか、ギルシェンは腕を下に降ろした。

「よし、昼休憩」

あれ、もうそんな時間か。時間が経つのを忘れるぐらい熱中したのはいつぶりだろう。

「ちょっといい？」

「なんだ？」

「俺の姉貴の事なんだけどさ…」

姉貴に何も言わずに一日うちに帰らなかったこと、ついでに両親もいないことを伝えると、案の定の言葉が返ってきた。

「一回あっちに帰せってか？ あー、そりゃダメだ」

「なんで」

「お前、異世界から異世界をつなぐ扉を開くのがどんだけ大変か知ってる？」

「そんなたいそうな話なの？」

「お前が儀式部屋にとばされたとき、周りに人が五人くらいいただろう？ あの人たちは、なにか大きな魔法を使うときに集まる、魔力の高い人たちなんだ。おまけにこの召還魔法はものすごい力を使うから、私事で動かせるものじゃないんだよ。ましてや人一人持つてくるなんてーのは…」

なんかややこしいこと言ってるけど、つまりちょちよいと行って帰る事はできないってことか？

「ん？ 人一人ってことは、その転送する対象が小さければいいの？」

「まあ…そうだな。試したことはないようだが」

「じゃ紙を置いてくれない？ 書き置きしておけばとりあえずは心配いらなだろうし」

昼休憩後の訓練も終わらせて、送る為の文を書くことになったんだけど、さてここで問題が発生。

いきなり「異世界に行って世界を」なんて書けば頭がハッピーになったのかと思われそうだし、「ちょっと出かけてくる」っていうほど短い期間でもなさそうだし：はてさてどうしたものか。

なんて悩んでると、またドアをノックする音が。なんてタイミングが良いんだメイドさん。

「それは困りましたねえ」

手紙のことをメイドさんに相談してみたけれど、解決策は無いようだ。

「お姉様もこちらに呼ぶとか！」

「それができないらしいんですよ」

「えー：それでは、『お友達と長期間旅行に行ってきます』というのは？ 長い間お留守になっても、お友達と行かれたのなら安心なさるかも」

友達と旅行か、考えつかなかったな。それ採用。

と、言うわけで旅行に行ってくるということ、安心させるような事も書いて送ってもらった。場所指定もできるなんて便利じゃん。

これで一安心とため息。ぶっちゃけ帰りたいんだけどなあ：

第三話 姉のことを思い出した（後書き）

なんか雑でごめんなさい。

第四話 旅立ち宣言

鋭い刃が首を狙う。命はないと一瞬諦めたが、いつまでたっても痛みを感じない。

剣が、寸でのところで止められていた。

「…参りました」

自分の負け。これ以上抵抗すれば、次は確実に刎ねられるであろう。

「ふう…ありがとうございました」

男を殺すところまで追いつめた、もう一人の男が剣を鞘に収め、お辞儀をした。

「とうとう上級兵士を抜いたか」

「抜いたっていつでも、ギリギリ勝ったって感じ」

つい数日前にやってきた者に、自分が負けたという真実。認めざるを得ない実力が、あの男には秘められているのだ。

＊ ＊ ＊

こっちに来て二週間経った。

どれほどの実力が備わったのかを知るために、弱いヤツから順に対人をさせてもらった。

階級兵士の中で最高と呼ばれる、上級兵士に勝てた事の喜びはものすごく高いものだ。

上級兵士とは。階級別に別れている兵士で一番強い者のことを指す。

この城に仕える兵士は、それぞれ三段階にわけられている。下級兵士、中級兵士、上級兵士の三つだ。

下級兵士ってのは、一番弱く数が多いらしい。特待生以外はみんなここから始まるとか。中級兵士は下級の中でよりよい成績を持った者が上がれる、スタンダードな上がり方だ。

上級兵士は、下級から中級に上がるための方法とは少し違う。中級以上の成績もそうだが、魔法を少なからず扱えること。中級を圧倒できるほどの体術を身につけていること。

必然的に数は少なくなるけど、一人につき百人ほどの部下を従えることもできるリーダーみたいな感じ。別に「いらない」って言えば、そんなものは就かないみたいだけど。

そんな中、ギルシエンは上級のさらに上の特殊部隊にいるみたい。上級兵士より数枚上手な実力の持ち主だそうだ。

「あの人、大丈夫かな」

「なにがだ？」

「だってさ、つい数日前何にも知らないガキがこの城に来て、いく

らギルシェンが稽古つけてくれたからって俺みたいなのに負けるなんてさ…」

「なに、その程度のことです立ち直れないようじゃ失格さ。何回も失敗を繰り返さなけりゃ、上級になんぞ上がれないよ」

失敗続きだったら挫折くらいしそうなもんだけどなあ。それでも屈さない人があんな強くなるんだよな。

俺に負けたからってスランプなんかになったら気分悪いけど、それなら安心。

「それはそうと、これから国王様のところに行くぞ」

「なんで！」

「そーいやそーな顔するな。俺もなんで呼ばれたのか知らん状態だ」

なんかイヤな予感がする。

なにはともあれ、こんな格好で行く訳にもいかないので一度部屋に戻って着替えることにした。あんなちっこくても国王だしね。

王の間に入ると、ちっこい国王には似合わないどでかいイスに、国王は座っていた。

「二人ともよく来てくれた。今日呼び出した訳じゃがな、悠貴」

「俺？」

「一週間後、この城を出発してほしいのじゃ」

城を出発？　　ってことはまさか：

「つまり旅に出ろってこと？」

ちよつとまだ心の準備が：しかも早いよ！　まだ二週間じゃないか！

「早い？　間に合わせるのじゃ。最近妙に魔物の動きが活発になってきておる。これは魔王が動く前触れと見て良いだろう」

「今のお前なら、行けるはずだよ」

「そういう訳じゃ。ギルシエン、あと一週間で悠貴をもっと絞り上げてくれ」

「承知いたしました」

俺の意見は無視？　話を勝手に進めないで：

ものすごく困った。連日の訓練のおかげで自分が何しにここに来てるのか忘れかけてたし。

魔物って、人と違う形してるそうだから：会いたくないなあ、怖そうだし。

強くなったっていつでも、人間しか通じない強さだと思ってるし：。ああ、憂鬱だ。どうしよう。

姉貴に会いたくなってきた。そういえば大丈夫かな：心配してるかなあ。

一人で行くんだとしたら怖いなあ：

でも旅に出るってことは魔法も教えてくれるのかな？　少し楽しみだけどその代償が結構大きいような気がする。

うじうじ考えてもしょうがないから寝る。明日考えればいいや。
そうして現実逃避を試みる悠貴であった。

第五話 行くぜ！ 城下町

旅に出ると言われてから、三日後。あと四日。今日は初めての休みをギルシェンからもらった。

「連日続きだったから疲れただろ。本当は休憩する間も惜しんでの訓練なんだが、流石に疲れるだろうと思って今日は中止だ。」

と、言われたので今日は城下町に出てみようと思う。

城を出て少し歩くと、大きく賑わっている町がある。そこには一度行ってみたかったから、運が良かった。

こういうところは本当にゲームっぽいなあ……
お金も少なからず持つてるから、今日は色々お店をまわってみよう！

「と、思ったけど、地図がないと迷うなこれ」

いつのまにか薄暗い裏道みたいなところを歩いてた。

「ガタン！」

「うわぁ！」

「ニャア！！」

木材が大きな音をだして倒れたのか……猫！ 吃驚させるな！

歩けば歩くほど迷っている気がする。

さて、どうしたものかね。

腕を組んでちんたら歩いてると、悲鳴が聞こえた。

これは…女？ 助けに行った方がいいか！

思考がたどり着く前に足が勝手に動いた。場所的に考えると…ここか！

角を曲がった先は行き止まり。その行き止まりに一人の女と、いかにも悪っぽい顔の男が三人いた。しかも三人の手はナイフを握っている。もしかしてこれは…

「痛い目に遭いたくなきゃ金だしな、嬢ちゃん」

やっぱカツアゲかよ！ どこにでもいるもんだなああいうの。あれは助けた方がいいよなあ、たぶん。

「ちょっとそこのお兄さんたち、なにしてんの？」

後ろから声をかけると、スキンヘッドの顔に傷がある男が低い声を出しながら振り向いた。

「今いいことしてるんだよ。ガキはどっかいてろ」

「いや、この状況見る限りあんまりいいことじゃ無いと思うんだけど」

「うるせえ！」

男の左フックがとんできた。それを受け止め、投げ飛ばす。向かいの壁にたたきつけられた男は気絶したようだ。

「この野郎！！」

他二人が突進してきたところを、しゃがんで足を引っかけたら盛大に顔を地面に打って、転がった。
すぐに起きあがって、飛びかかってきた。

「ガン！」

かかと落としを食らわせてやったら、見事にのびた。残った一人は恐ろしい物を見るような目で俺を見ている。
俺やっぱすごく強くなってるわ。

「まだやる？」

「く…くそ！ 覚えてろ！」

敵わないと分かったようで、悪人トリオは尻尾を巻いて逃げた。
逃げ足速い。

「あの…ありがとうございます」

礼の言葉に振り向き、女…いや、女の子を見た。顔つきは少し幼く、歳は俺より少し下のようだ。

「いいんだよ。それより、よくあるの？ ああいうこと」

「巡回してる兵士さんに注意はされてたので、おそらく」

「大変だね」

「ええ…。それにしても、ずいぶんとお強いんですね。なにかなさ

っているのですか？」

「え？ いやあ、ちょっと強い人に稽古つけられてたからさ」

「そうなんですか？ 才能あるんですね」

才能、なんて言われると照れるんだよなあ。別に何もしなくてもここにいるときは力が強いから才能なんて無いだけだね。

「それでは、私は用があるのでこれで。本当に、ありがとうございました！」

そう言ってタタツと走っていった。この世界は美人が多いみたいだ。

去っていく後ろ姿に見とれてたら、道を聞くの忘れてた。

「ぶらぶらしてればその内明るいところに出るかなあ」

薄暗いと同時になんかほこりくさいので、とつとどこから出たんだな。

* * *

「やっと抜けたー！」

賑わいが聞こえたのでそこに向かってみれば、やっぱりそこは明るい商店街だった！

いやー、よかったよかった。

「おう、その兄ちゃんこれなんかどうよ！」

元気の良いおっちゃんに声をかけられた。おっちゃんの手をみると、なんとも美味しそうで生臭い魚が一匹。

「へえ、美味しそうだ。でも今はいいや。今度買いに来るよ」

「おう！ 今買わないんなら次来たときに買ってくれや！ 安くしとくからよ！」

本当に元気だなあ。あれくらいやらなきゃ商売にならないんだろうか。

さて、俺が本当にまわりたいのは八百屋なんだな。城の料理も美味しいけど、デザートに果物がないから少し物足りなかったし。ここはどんながあるんだろう？ その前に果物ってあるのか？

店の看板を实ながら歩くと、仕立て屋、雑貨、パン屋、アクセサリー、御食事処：いろいろ見つけた。

お総菜を売ってる店の角を曲がると、やっと八百屋らしき店を見つけた。

ニンジンの形をして青かったり、虹色のピーマンなど：とにかく見るからにまずそうなのと、赤くて四角いのや、苺がブドウの房みたいになってるおいしそうなもの：初めて見る物ばっか。

「おばちゃん、これちょうだい」

「あいよ」

中でも目を引かれた、青いトゲトゲした果物を買った。

トマトをベースに、ちっちゃい角のようなトゲトゲがある、青いの。

こういうのは突起物から食べたくなるよねー。

「ん…こ、これは！」

メロンのような甘さに加え、トマトのような柔らかさ…そしてあふれんばかりの果汁…

これは旨いぞお！

「初めて食ったけど超うめえ！ おばちゃん、サンキュー！」

気前の良いおばちゃんは、その実をもう一つおまけとして俺にくれた。

ここから勢いがついたように、お店というお店をまわり尽くした。

気づけば日は落ち、人の数もまばらになっていた。

初めて行く城下町は、とても楽しかった。

城に戻る頃には、周りは真っ暗。それで気づいたんだが、ここって街灯がないみたいだ。

「あ、おかえりなさい悠貴さん。出かけてらしたんですか？」

「ただいま。ちょっと城下町回ってきたんだ」

「そうなんですかあゝ。あの町は行商人もよく立ち寄る場所だそうです。だから、珍しい物も多いんですよ」

確かに珍しい物も多かったよ。服なんて本当にRPGに出てきそうなものばかりで。試着してみたけど、あんまり着心地は良くなかった。

「あ、トリシエ様が悠貴さんにお会いしたいそうですよ」

「トリシエ？」

「トリシエ様は魔法学校の先生をしているお方です。学校の教師の中でも、ずば抜けて魔力も教え方もスゴイそうですよ」

「そういうのってやっぱりあったんだ…」

「？ 何ですか？」

「いえいえ、独り言です、独り言」

魔法学校かあ…まさかそんなのまであるとは。

ずば抜けて強い…そんな人が俺になんの用だろうか。

あ、もしかして魔法教えてくれたりするのかな。

メイドさんに「おやすみ」を言って、俺はトリシエが待っている図書室に期待を胸に足を向けた。

第六話 魔法と筋肉痛

少し暗い廊下の先にある図書室のドアを開けた。

そこは、図書室というより図書館のような広い空間と、それ相応の本の数だった。

「やあ、来てくれましたか。悠貴くん」

上から声がした。見上げると、優しく微笑んだ女性が見下ろしているのが見えた。

あれがトリシェさんかな？ 済んだ青色の瞳に、腰までありそうな長い白銀の髪。ものすごく綺麗な人だ。

トリシェ・パウロ。その女性はそう名乗った。

「初めまして、トリシェさん。俺に何か用があると聞いたのですが」

「君はもうすぐ旅立つ、と聞いたものでね。魔法でも教えておいたほうがいいかな、と」

よかった、予想通りだ。

剣の技だけで魔物と戦うのは不安だったから、安心した。

そういえば最初、魔法ってギルシェンが教えてくれるもんだと思ってた。

トリシェさんが読んでいた本を閉じて、「行きましようか」と歩き出した。

どこに行くのかと聞くと、中庭だとか。いつもの訓練場は、他の人たちが使っているという。その日はどうしても抜かせない特別なことだとか。

あれー、もしかして今まで使えてたのってムリに使わせてもらってたってこと？　なんか罪悪感あふれるんだけど。

中庭は、とても暗かった。たいまつはあったけど、火がついてない。

暗闇の中にトリシェさんが歩み進む。銀色の髪すら確認できない。

「ボツ」という音と共に、周りが明るくなった。トリシェさんがたいまつに火をつけたみたいだ。

「来てください。簡単なものから教えましょう」

火の明かりに照らされた顔は本当に綺麗だな…

「想像してください。貴方の指先にエネルギーが集まり、そこから火が出てくることを」

おっと、そんな事考えてるところじゃなかった。

想像か…元々、そんなに想像力無いからいきなり言われても…

「魔法は、想像をして創造するのです。できると信じ、できると信じる」

創造をして創造する…難しいことを言うなあ。でも念力って「動け」って念じればできるって話し聞いたことあるし、それと同じなのかも。

とりあえず、火を指から出す…指から出す…指から……………

：だめだ、できそうにない。そもそも指から火が出ること事態異常事態だから想像のしようがない。

そうだな：指から出るんじゃないくて、少し離れたところから出るのはどうだろう…？

「シュボッ」

「意外と簡単にできましたね。合格です」

指先から出るのは怖いから、少し上に出るようにやってみたら案外簡単にできた。

それからは、火を含め五つの属性を試した。

風をおこそうとしたらそよ風が。

土と言われたら、地面に小さな突起物が出る程度。水と言われたら雨粒ほどのものができた。木はと言われやってみれば、地面にかわいい芽が出た。

「器用なものですねえ」

トリシエさんに目を見開いて言われた。俺が器用なのって、やっぱり異世界パワーかな？

「でも、全部しよばいことしかできませんでした」

「これが初めてなんですからしょうがないですよ。逆に、小さいながらも五つの属性を出せるというのがスゴイことです」

「普通はできないものなんですか？」

「一般ならばできて二つ、三つが限度と言ったところでしょ。四つからは才があると言われるくらいです」

四つをとばして五つってすごくない？

「ところで、どの属性が一番しっくりきましたか？」

「うーん：最初にできた火がやりやすかったような」

「なるほど」

この後に聞いたのだが、火の魔法は一番覚えやすく、初心者に丁度良い属性なのだ。

だからあんなにやりやすかったのか、って理解したけど少し悔しい気もした。

しばらくやっている内に、魔力の引き出し方もコツが分かってきて、バスケットボールくらいの火の球が出せるようになった。

「綿に水をしみこませるかの如く、学習能力が高い」ってほめられた。

とにかくその日は、日が昇る前に終わった。明日は剣の訓練もあるからってことでトリシェさんが終わらせただけ、それだったらもっと早く終わりにして欲しかった。眠い。

初めて魔法を使つての感想は、すごくおもしろかった。メルヘンにことに興味が無いと思つてたけど、ここまで楽しくなるとは。恐るべし魔法の世界。

朝起きたらなぜか全身筋肉痛に…すごく…つらいです…

「おはようございます、悠貴さん」

つらくても…起きなきゃダメですか。

ぎこちない動きで食べてると、メイドさんに心配された。今日は…休みたいです。

弱音を吐こうとしたらドアが勢いよく「バーン！」と大げさな音を立てて開いたもんだから、吃驚して息を飲み込んだ。

「よう悠貴、生きてるかー？」

ドアを破壊せんばかりに勢いよく開けたのは、ギルシェンのようだ。

漫弁の笑みしやがって…ちくしょう。

「一体なにしにきたの？ ドアぶっ壊しそうな勢いで」

「いやー、昨夜のお前の功績について聞いたんだよ。そしたらお前、五つも属性あるんだって？ これは育て甲斐あるなーとウキウキしながらお見舞いしにきた」

「俺が筋肉痛になったのおもしろがってるな？」

「それが八割」

時たま、子供みたいなのをするのがこの人なんだと、この間分かった。

真面目なときと不真面目なときのギャップが目立って、見てて面白い。

「ところで、なんで俺は筋肉痛になったの？」

そしていつの間にか敬語を使わなくても怒られなくなった。

「最初の頃に言っただろ？ 魔法を使ったときに体力も消耗するって。上から見てたけど、初見でもって初挑戦するヤツがあんなにできたんだ。いくらお前が普通じゃないからと言っても、疲労はものすごく溜まる。ま、やり方次第で消耗も少なくすることができるとな」

「それを一刻も早く知りたいんだけど」

「そう焦るな。今日のメニューにそれについての授業を入れた。体にムチ打って訓練場に来てくれ」

「じゃーなー」と陽気な声を出して出て行った。俺をからかいに来たって言うのがむかつくところだが、俺が大人になれば：

とにかく、訓練場に行かなきゃいけないので、メイドさんが作ってきてくれた朝飯を食って、だるい体を超頑張って動かし、闘技場に行った。

道中五回ほど躓いた。

第十話 城内探検

そう言えばお城の中ってどうなってるんだろう？

自分の部屋と、訓練場、王の間の行き方は覚えてるけど、それ以外って行ったことない。

そーんな疑問が生まれたので訓練が終わった夜に城の中を探索したいと計画したわけだ。

今更だけど、この城はかなり広い。ちょっと歩くだけで迷いそうになるくらい。

でも迷ってるときの緊張感と、なにがあるのか好奇心をくすぐられるのがたまらなく面白いんだよね！

まあ、もう既に迷ってる訳だけでも。

「あら？ 勇者様、こんばんは」

通りすがりのメイドさんに挨拶された。別にメイドさんって言うても俺の世話してくれてるあっちのメイドさんじゃなくて、そのほかのメイドさん。なんかややこしいな。

右に曲がったり左行ったり、階段上ったり下ったり、適当に進む。その内どこかに着くだろうと信じて。

階段を降りたところで、なにかいい匂いがした。これは…調理場？ 食欲をそえられる匂いに誘われて行くと、「トントン」と包丁を使ってるような音が。複数のコックさんが鍋をかけながら野菜を切っていた。

そういえばこは人が多いから、どんだけの量作るんだろうか。あんな大鍋アニメでしか見たことないわ。

大鍋の中を見てみると、これまた美味しそうな豚汁が。

「あれえ、勇者様ですか？　こんなところに何の用でしょう」

大人一人ぐらいあるでかい豚を片手に、もう片方はこん棒を持って、もう一人コックさんが出てきた。

「城の中を探検しようと思ひまして。匂いを誘われてきたらここに辿り居た訳です」

「ハッハッハ！　少し味見していきますかい？」

器によそってくれたので、断る訳にもいかずに味見した。決して腹が減ってたから食べるなんて考えじゃない。決して。

「ん…んま！　すっごくおいひれふほれ」

「そうかそうか！　それは良かった！」

熱くてろれつがまひゃわなない…失礼、回らない。でもできたてが一番美味しいのはよく分かってます！

豚汁まで頂いちゃって、いい人だな。また今度来てみようっ♪

特に目指してた訳でもなかったけど、図書室についた。見覚えの

ある道だったからかもしれん。

しかし、何度来ても怖いぐらいの本の量だと思う。地震とかでこの本たちに襲われたら生きられる自信がないわ。

「魔法学書」って題の本があったけど、今は別のことやってるから次来たときに読もうっと。

これだけでつかいと昼間なんかは結構人が来るらしい。今は夜だから、そこまで多くはない。

「あ、勇者様こんばんは」

「ん？」

「あら、こんばんは勇者様」

「初めまして勇者様！」

一人が俺に気づいて挨拶すると、それを聞いた他の人たちにも気づかれた。

いつのまにやら四方を囲まれてしまった。

「なにをお探しに？」

「どうやってこちらに来られたのですか？」

「勇者様のいた世界って、どんな感じでした？」

「理想の女性ってどんな感じですか!？」

ちよっと最後の人そんなの聞いてどうするんデスカ。

囲まれた俺は有名人にでもなった気分。気分は悪くないけど、動けないのは困る。

「すいません、ちょっとこれから行くところがあるんで…」

「好きな食べ物は何？」

「歳はおいくつなんですか？」

「ご趣味は何？」

…合コンか！　ってか逃げられねえ。

しかたない、こうなれば逃げるしかあるまいよ。

「すいません！　それじゃ！」

全速力で走ったら俺に追いつくヤツはいないぜ！　この足も主人公特権なんだけども。

走ってる途中、楽器を鳴らしているような音がした。

耳を頼りに音を辿る。

ドア越しに、音楽が聞こえる部屋に着いた。たぶんここでだれかが演奏してるんだろう。

ノックして、開ける。部屋の中は、学校の音楽室によく似てる。学校にピアノがある場所には、こっちでもピアノがあった。…でも音がちよつと違うような気がする。なんて楽器なんだろう。

弾いている人はだれか見てみると……あれ？

「ん？ なんの用だ」

なんでアンタなんだギルシェンんん！

「楽器なんか弾けたのか！」

「趣味でやってたらできるようになったただけだ」

趣味でできるとか：羨ましすぎるわ。こちとらやりたくても場所も道具もないってのに。

「ところでこれってなんて名前なの？」

「ピアノ」

アイスの名前かと思った。向こうのと似たり寄ったりな名前だな。
。

「お前、こんなところまで何しに来たんだ？」

「いや、ちょっと城の中を探検」

「外に出られなくなっても知らんぞ」

「迷ったらギルシェンに助け求めるわ」

「俺今でも城の中迷うんだけど」

「それはいかがな物かと」

今回の目的は、把握するためなので城のさらに奥に行く。いや、さっきのところはそこまで奥ってほどじゃ無いんだけど。

区切りの良いところで帰るとしよう。

それにしても肌寒くなってきた気がする。松明に火が無いからかな？ そのおかげか暗くなってくるし：

途中で引き返せばよかったものの、視界が真っ暗になるところまで来てしまった。三六〇度全て闇。これは：どうしたものか。

「あ、魔法で明るくすりゃよくね」

思いついたらすぐ実行。この前教えられたことを思い出しながら、火を出す。

キャンドルみたいなちっちゃいのも、結構明るくなるもんだ。

さて、いい加減戻って寝たい。何時なのか分かんないし。

今来た道をもど：

：十字路ってどういうことすか：？ 城の中で十字路って：

さて：今日中に帰れるかな。頑張ろ。

と意気込んで何時間ぐらいか経った頃。さらに迷宮入りしたのは言うまでもない。

第十話 城内探検（後書き）

どんどん更新率が下がってきてる気がする。
もっと早く書けるように頑張ろうと思いました。頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5956h/>

魔法の世界で

2010年10月11日01時12分発行